

## シニア文武両道の再開（巣ごもりで学んだこと）

伊藤 二郎

### はじめに

コロナによる巣ごもりが2020年3月から8月頃まで続いたが、9月から会議やオンライン会議が増え、シニアラグビーの練習に参加するようになり、11月3日には対外試合も始まった。9か月振りの試合で、気分が壮快になり、ラグビーを楽しむことができた。巣ごもりではジョギング、英語、論語、読書、囲碁研究は、ルーティンとして最適であり、毎日楽しんでいる。ここでは、渋沢栄一関連の読書を中心とした巣ごもりで学んだことを述べる。

### 1. 母の力（横田家の悲劇が富岡日記を生む）<sup>(1)</sup>

幕末、信州松代藩の横田家の九郎左衛門は、幼少の頃から、文武両道を心掛け、藩の殖産興業のため苦心した。藩の富国強兵ためには、商業が大事なことを諸国巡りでわかったという。千曲川の難所を掘削工事により、通船出来るようにして、物流を増やそうとして完成したが、江戸幕府に差し止められた（謀反の疑い？）。

しかし、九郎左衛門は断念せず、学問の力で成功させようとし、江戸表の徳川に仕えていた林大学頭の塾に入った。普通の人には怨みを学びで返すようなことはできない。すごいことである。

塾で頭角を現し、評価されたが、2年半を過ぎて28歳でチフスにより死去した。ここから悲劇の始まりである。九郎左衛門の妹の亀代は決まっていた嫁ぎ先を断念させられ、横田家に残り、婿を迎えざるをえなかった。

亀代の次女の和田英（結婚前横田英）が「富岡日記」の著者である。「富岡日記」は約1年間の富岡製糸場（渋沢栄一の尽力により、1872年官営で設立された。）とその後、長野県西条村にできた西条製糸場で製糸工女として働いていた時の日記である。この「富岡日記」によって、横田家の悲劇が歴史に残った。和田英は官営の富岡製糸場の場長であった尾高惇忠（渋沢栄一の子ども時代の師）から与えられた「操婦は兵隊に勝る」という書が彼女の一生を支えた。

英の母亀代は子ども達の養育に力を注いだ。「あんな優れた兄が死ぬなら、神も仏もない」と思ったのである。英の弟、秀雄は大審院長（最高裁長官）・明治大学学長、謙次郎は鉄道大臣、俊夫は大邱（テグ）地方法院長を勤めた。

（注）写真1. 母の趣味は、お琴や三味線で、ボランティア活動は民生委員や日赤で幅広く活躍し、また6人の子どもの教育にも力を入れてくれた。その母の言葉の重要性に最近気が付いた。

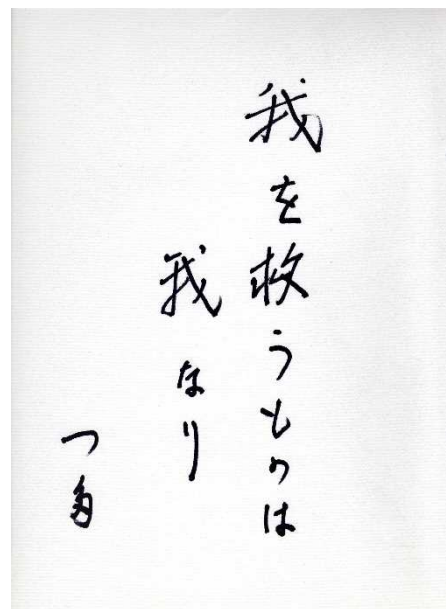


写真1. 結婚式における母からの言葉（色紙）

## 2. 育てる力<sup>(2)</sup>

野球の練習をしてスキルアップするのはもちろんだが、その前に人としての人間力を高めなければならない。そこで栗山監督は一人ひとりに手渡すのが「論語と算盤」<sup>(3)</sup>である。本書には「利潤と道徳を調和させる」という理念が書かれている。お金を稼ぐことと人に尽くすこととは一見、対局にあるようにみえる。でも、渋沢は皆の富のために力の全てを使ったのだという。経営の世界でできるなら、野球でもできるはず。そんな思いから、若手に本を渡すようになった。野球選手は人間として成長しなければ、選手として成長できないと感じている。

最初は自分のためのプレーであってもいいのだが、いずれ家族のため、そしてチームのため、ファンに喜んでもらうため、……。誰かに喜んでもらえることが原動力になるチームを築きたい。

栗山監督がヤクルトの2軍の選手するとき、2軍監督内藤博文から、全体練習の後、個人練習を受けた。その時の内藤監督の言葉、「昨日より、今日、今日より明日、お前が少しだけうまくなってくれば、おれは嬉しい。それだけでおれは嬉しい。自分と他の選手を比べるな。今日の自分を超えていくことだけを考えろ。」「競争すべきは相手ではない。自分なのだ。」(栗山)とはっきり認識できたのである。日頃生活をして、鍛錬するとき、普通だと他人を比較しやすい。これだと、モチベーションが上がらない。毎日少しずつ努力し、小さな成長を楽しめることが生きがいとなる。

## 3. ドラッカー<sup>(4)</sup>

ドラッカーは1909年オーストリア＝ハンガリー帝国のウィーンに生まれ、1937年アメリカに渡った。ドラッカーの目にはナチスによるヨーロッパ支配とともにそれに続くヨーロッパの廃墟が見えた。その廃墟から立ち上がるための方法論を探して、明治維新を発見したのがドラッカーだった。明治維新後の日本は、自らを西洋化することなく、西洋を日本化した。物見の役を自認するドラッカーにとって、源氏物語、白隠禅師、明治維新、渋沢栄一が師だった。

マネジメントの本籍は経営にはない、文明社会にある。マネジメントには三つの役割がある。自らの組織に特有の役割を果たす。仕事を通じて働く人たちを生かす。社会へのインパクトを最小化する(企業の社会貢献とか社会への責任)。利益、収益、コストカット、リストラなど金にまつわることを述べていない。

知識社会とは本質的に多元社会である。企業に勤めながらも副業やNPOなど社会活動は時間を作って積極的にした方がいい。個の知識は企業の占有物ではない。高度な能力ほど、むしろ社外で生かした方が本業のためになる。企業が個人に提供できる経験などたかが知れている。企業が個人より長生きする保証はない。人間の方が企業よりも長生きし、しっかり自立している方が、企業にとってははるかにありがたい。

## 4. 渋沢栄一<sup>(5)</sup>

1840年現在の深谷市に生まれ、1845年から数年、商人の父と従兄弟尾高惇忠から、四書、五経などを学ぶ。1863年、高崎城乗っ取り計画を中止し、1864年一橋慶喜に仕官する。1867年、パリ万博に徳川慶喜の弟、徳川昭武が派遣され、渋沢栄一も付随し、会計と書記を担当した。会計事務

の運用（株や公債を売買）などで、経済の原理を知る。この知識をもとに、日本に近代的資本主義を根付かせた。

1868 年大政奉還後に静岡にいる慶喜と再会。1869 年静岡藩に日本最初の商法会所（株式会社）を設立した。1869 年 12 月大蔵省への辞令を受ける。大蔵省での仕事は貨幣制度、租税の改正、公債の方法、合本法（少額を多くの人から集める資本）の制定などである。

1873 年に渋沢が大蔵省を辞めて、500 余りの株式会社（インフラにかかわる企業、外国製品に替わる国産製品を生み出すための企業、製品等が円滑に流通するためのサービス企業）の設立にかかわり、日本資本主義の産婆役となった。

著書「論語と算盤」は義利合一（富みながら仁義を行う）という、渋沢が一生の信条とした思想が語られている。利潤追求する企業人においても道德（義）と経済（利）は矛盾しないどころか、むしろ両者のバランス感覚こそが孔子が論語で説く儒教思想の核心であると繰り返し力説している。論語と算盤という理念は、儒教で育った明治人に共通するものではない。むしろ、渋沢以外の人間には思いつかなかった特殊な経済思想なのかもしれない。



写真 2. 渋沢記念館（深谷市）見学

（左が筆者、右が深谷市在住の吉田輝義氏、GWRC（早大ラグビー同好会）先輩 92 歳 2019 年 4 月撮影

## 5. 考えるべきこと

渋沢栄一は子ども達に「すぐれた人物になってくれとは頼まんが、是非とも善良な国民にはなってもらいたい。」とよく言ったそうである<sup>(6)</sup>。多くの人々と接触してきて、本音の願望だったのであろう。渋沢栄一の孫の穂積重遠は最高裁判事となったが、「道德が法律よりも上位である」という思想をもっていた<sup>(3)</sup>。(元)日本ラグビー日本代表監督大西鐵祐（東南アジアでの戦争体験あり、戦後、平和を願ってラグビー指導に従事）は「合法か非合法か。それを行動の規範にしてはならない。きれいか汚いか。こちらが上位なのだ。『ジャスト（ルール）よりフェア』<sup>(7)</sup>と選手にいつている。ラグビーでルールを守っていても、安全でない場合があるからである。フェア精神で相手選手をけがさせないようにしなければならない。この 2 つは似た性質を持ち、ルールや法律だけで判断されていることが世の中では、ほとんどであるが、考えるべきことである。

## 6. 参考文献

- (1) 「富岡日記」 和田英、みすず書房、2011年2月21日
- (2) 「育てる力」 栗山英樹、宝島社、2018年4月19日
- (3) 「論語と算盤」 渋沢栄一、角川ソフィア文庫、平成20年（1990年）10月25日版
- (4) 「ドラッカー入門」 上田惇生、井坂康志、ダイヤモンド社、2014年8月28日
- (5) 「渋沢栄一」（Ⅰ算盤篇、Ⅱ論語篇） 鹿島茂、文藝春秋、2011年1月31日
- (6) 「渋沢栄一」 渋沢秀雄著、公益財団法人渋沢栄一記念財団、昭和31年（1956年）10月1日
- (7) 「闘争の倫理（スポーツの本源を問う）」 大西鐵之祐、鉄筆文庫、2015年9月30日の解説「ジャストよりフェア」 藤島大（スポーツライター）

（原稿受付、2020.11.4）